

若者が住みたくなるマチを目指して

地元定着へ郷土愛醸成



県関係国会議員と各界代表が若者流出に歯止めをかける取り組みについて幅広い視点で議論した
＝東京・日本プレスセンタービル



鈴木憲和氏

地元や地方に来てほしいという取り組みに力を注ぐべきだ。若い人の意見を聞く、若者会議も求めたい。

黒田 旅行で山形を訪れた際、山形の人々が自然に憧れ、ここで子育てしたいと思つた。仕事を辞めて夫と移住した。暮らの中で、誰かのためにできることがあるということに喜びになった。米沢市の里山で小さな英語塾を経営し、自宅裏に広がる原野や畑で農的な暮らしをしている。

「アドバイザーから」これまでの議論について感想、アド

黒田代表は東京都出身で海外居住経験もある。自然豊かな米沢市に移住し、里山を拠点に若者も巻き込んだ多彩な活動を展開している。

若い人が山形に住みたいと思えるようにするには「幸せに暮らす大人の姿」を見せることが大切。東京でカフェを営んでいる人に、地元の人が描いてくれた我が家の絵を見せると「移住したい」と言つてくれた。企業に勤めるだけでなく、起業し仕事をつくることも重要。家族や、自分の存在を認めてくれる人がいて、幸せのシーンが見える場所に若者は戻ってくる。

若者が地元に戻ると「誇りある郷土をつくる」ことが重要。地域経済を活性化させ、付加価値の高い商品を生み出していくには、第1次産業を元気にしていくことが欠かせない。人が集まり、交流し、楽しさやアイデアが生まれる環境を整えるため、商店街などを含めてにぎわいをつくり出していくことも大切だ。

バイスをお願いしたい。



加藤 鮎子氏

進学で県外に出た学生の人生のプランの中に、古里へ戻ることに思いをはせる機会を早い段階でつくるのが大切だ。

唐沢 最大の課題は人づくりに。東京から地方へ、人の流れを変えることにある。現状では1都3県の「東京圏」への若者の転入超過が続いている。ただ、全ての若者がずっと東京で仕事を続けたいと思つていいわけではない。5割の若者はいい仕事場や環境があれば地方で暮らしたいと思つている。どのアンケート結果がある。若者が地元に戻るよう、誇りある郷土をつくるべく、誇りが重要。地域経済を活性化させ、付加価値の高い商品を生み出していくには、第1次産業を元気にしていくことが欠かせない。人が集まり、交流し、楽しさやアイデアが生まれる環境を整えるため、商店街などを含めてにぎわいをつくり出していくことも大切だ。

遠藤 山形に住んでいる人が、逆に地元の良さを分かっているという点を知り、発信していくことが大事だと改めて思っている。インターンシップという点では大学生に加えて、高校生が参加する機会をさらに増やしたい。いったん県外に行くことは決して悪くないが、県内に住んでいる子どもたちに地元企業の良さをもっと分かってもらうことが重要だ。給与が少し低い低くても、子育てに力を入れていたり、強いリーダーシップを持つていたりする会社がある。高校生のうちに数カ月間の職業体験をすることで、企業への理解が深まる。山形に對して自信を持ってもらうことが重要で、それが若者の定着、帰帰につながる。

鈴木 若い人たちが住みたいと思つようするには、地域を定元から見直すことが大切で、発想の転換が必要だ。「若者を流出させないよう」という考え方は、やめたほうがいいのではないかと。むしろ地元や地方に来てほしいという取り組みに力を注ぐべきだ。古里のために役立ちたいという心を育む教育や地域のあり方も重要。若い人の意見を聞く、若者会議のようなものも求めたい。日本には若い世代の意見を吸い上げる仕組みがまだ十分ではない。過去例は参考にしない時代になっている。新しい幸時代のあり方を山形でつくることのできるはず。若い人が集える場所をつくり、そうした取り組みの点と点をネットワークにしていけばいいと思う。

加藤 進学して県外に出る学生の3分の2は、その時点では将来、古里に戻りたいと考えているが、実際の卒業時は減ってしまったという。在学中に何が起きているかをひもとけば、そこにあるヒントがあると思う。人生のプランの中に、古里へ戻ることに思いをはせる機会を早い段階でつくるのが大切だ。無理やり戻そうということではなく、もっと就職先のイメージが湧くように、企業と学生の接点を設けたい。さまざまな課題を抱えている若い世代の多くは、最終的には自分の居場所を求めているように感じている。地域コミュニティにはそういう居場所があり、その価値に若いうちから気付いてもらうことが大事になってくる。

舟山 小国町に嫁いで2、3年後、地元のにぎわいプロジェクトのメンバーとして声が掛かり、よそ者にも出番をもらえたようにうれしかった。若者たちも出番をもらえれば、自信と喜びにつながるはずだ。住みたいと思える地域づくりはハード面とソフト面の努力が大切だが、交通の便が良くない町村部でも人口が増えている地域はある。共通するのは空き家利用や子育て支援のほか、地域の人が歓迎している点だ。喜んで受け入れてくれるということは移住者の居心地の良さにつながる。また、自らの仕事がつまらないと思つたり、このまちは駄目だと思つたりしている場所には集まらない。地域の魅力に自信を持つこと。これもハード面以上に大事だ。

兼子 神奈川県大の学生は下宿生が4割を占め、全国から集まっている。一方、地元に戻る学生は平均すると約1割。山形県についてはここ10年で2割が帰っており、帰る割合が高い。それだけの魅力があるという自信を持つてほしい。地域の中には文化や歴史などを含めた潜在的な資源がたくさんある。誇りや大切に思うものを、まずは地元の人に発信してほしい。大学の教育の中で連携できることとほしつかり取り組んでいきたい。大学として中小企業との連携を深めているが、学生には情報が行き届いていない。

舟山 康江氏
自らの仕事がつまらないと思つたり、このまちは駄目だと思つたりしている場所に人は集まらない。



舟山 康江氏

大沼 私小さな頃から祖母のいる山形で夏休みや正月を過ごした。祖母の教えは(子ども)の成長にとって大きい。自治体はUターン事業に取り組みが、もっと民間を巻き込むべきだ。旅行会社に対し、孫が夏休みや年末年始以外でも山形の祖母の元へ行きやすい商品づくりを求めた。小さな頃から山形の文化風土に触れれば将来の選択肢に山形が入ってくる。米ポートランドは女性が起業しやすい地域として評価が高い。山形の国会議員は男性より女性が多い。知事も女性。チャレンジしたい全国の女性が集まるような仕掛けもいいのではないかと。観光を推進することも重要。それが地域インフラを整え、産業を支える。県を挙げた施策が必要だ。

14面に続く